

BIPROGY 株式会社

2026 年 3 月期 第 2 四半期決算説明会 （2025 年 11 月 5 日開催）

主な質疑応答 （ご理解いただきやすいよう表現を変更している箇所があります。）

【質問者 A】

Q：不採算となる懸念案件について、2Q（7-9 月期）にシステムサービスに計上したのか。3Q（10-12 月期）以降の計上になるのか。どれくらいの規模感を想定しているのか。

A：2Q では計上していない。計上されるとすれば 3Q 以降となる。システム開発案件だが、アウトソーシング契約となっている案件である。不採算額の規模感は、現時点では 10 億円程度を見込んでいます。

Q：システムサービスの受注について、2Q は金融機関向けとサービス業向けの大型案件の計上もあり非常に好調だったようだが、大型案件の影響を除いた全般的なトレンドとして、3Q 以降も好調と見ているか。

A：全体感として、DX 需要が引き続き強く、案件パイプラインもしっかりあることから、システムサービスの受注は引き続き堅調に推移すると考えている。「BankVision」の新規採用に伴う、大型のシステムサービスも今後寄与してくると思う。それを除いても、中小型案件を含め、多くのお客様で DX 投資が活発と見ている。

Q：製品販売（ソフトウェア、ハードウェア）について、2Q の受注は前年同期に大型案件の計上があった影響により減少したが、3Q 以降も IT インフラ投資需要は好調が期待できるか。

A：3Q 以降も投資需要は力強く、引き続き堅調に進むと想定している。

【質問者 B】

Q：不採算となる懸念案件について、10 億円はプロジェクトの売上収益の規模か、赤字額か。不採算となる確度はどれ位と想定しているのか。下期に計上される前提か。また、いつカットオーバーする想定で引き当てるのか。

A：10 億円は赤字額である。現在、お客様との交渉や、コストの精査をしている段階ではあるが、不採算となる確度は高いと考えている。下期に 10 億円の不採算が計上される前提での通期業績予想である。アウトソーシング案件のため、カットオーバー時期ではなく、アウトソーシング契約が終了するまでの期間の収益・コストを現在価値に割り引いた金額をベースに、回収不能が判明した時点で引き当てる。

Q：サポートサービスについて、通期の期初予想を下方修正したが、2Q の減益幅が 1Q よりも拡大した要因と、下期には回復する見通しとなっている背景は。

A：2Q はリポートが減少した影響があったことに加え、ユニアデックスにおける人件費上昇を踏まえた価格改定が遅れていることが影響している。交渉事であり見通せない部分はあるが、下期以降は価格改定が進むと想定している。

Q：アウトソーシングについて、「BankVision」の新規採用による上期業績へのインパクトは。金額を含め、想定通りだったのか。

A：初期料金としては、10 億円程度の売上収益であり、利益面も高収益で想定通りである。計画上は下期計上と想定していたが、前倒しで計上された。

【質問者 C】

Q：売上収益を上方修正したが、ソフトウェアは下期減収、ハードウェアは下期横ばいの想定とした背景は。

A：ソフトウェアは、前期 4Q（1-3 月期）にメインフレーム関連と住宅メーカー向けの自社ソフトウェアで 30 億円程度の大型案件があった。上期の受注は増加しているが、前期の大型案件の剥落を想定している。ハードウェアは、前期下期に大型案件があったが、今期も下期に大型案件を見込んでいるため、横ばいの想定としている。

Q：AI 駆動開発について、生産性向上の見通しや、顧客案件での適用開始などの進捗状況は。

A：開発工程そのものを変えようとしている。スクラッチ開発での生産性や、パッケージへのスイッチにより、生産性向上のパークセンテージは変わってくるので、一律での目標値は示していない。社内では目標を定め、システム開発だけでなく、運用の効率化や上流工程での AI 適用などもチャレンジしている。年度決算のタイミングでは、何らかの形で開示できるよう努力したいと考えている。

Q：上期の持分法による投資損益について、前期 4.6 億円から 9.8 億円に倍増しているが、その理由は。

A：1Q に持分法適用会社の一部事業を売却した一過性の収益の計上が影響している。

【質問者 D】

Q：「BankVision」の初期料金の計上が想定より早かったが、開発も下期から始まるのか。

A：多段階契約となるが、今後、フィットアンドギャップ工程や製造工程に進み、2 年目・3 年目に開発ボリュームが大きくなる。

Q：「BankVision」の次のパイプラインの状況は。

A：パイプラインはあるが、鋭意セールス中であり、公表できる段階にはない。

Q：社内基幹システム刷新について、進捗状況は。

A：上期中に結合テストが完了した。現在、利用部門を含めた受入テストを実施している。予定通り、2026 年 4 月に稼働できると考えている。コスト面についても計画通りに進んでいる。

【質問者 E】

Q：不採算となる懸念案件について、アウトソーシングの契約期間が残っているとのことだが、今期に損失計上することで契約期間満了まで収支が等しい状態となるのか。それとも、来期以降は通常の利益が期待されるのか。

A：アウトソーシング契約であるため、現在、一部資産が無形資産に計上されている。今後予想される収益と、発生が見込まれるコストを現在価値に割引き、回収予想額を算出し、その算出した回収予想額と無形資産の簿価を比較し

て、回収予想額が簿価を下回っている部分を減損計上する予定である。その後は、収益やコストに変動がなければ、利息分のみ計上されていく想定である。

以上

（注意）

本資料における将来予想に関する記述は、現時点での入手可能な情報による判断および仮定に基づいております。

実際の結果は、リスクや不確定要素の変動および経済情勢等の変化により、予想と異なる可能性があり、当社グループとして、その確実性を保証するものではありません。

また、これらの情報は、今後予告なしに変更されることがあります。

本資料は投資判断のご参考となる情報の提供を目的としたもので、投資勧誘を目的として作成したものではありません。

本資料利用の結果生じたいかなる損害についても、当社は一切責任を負いません。